

〈2月26・27日実施〉

出題意図

一般入試 [第2期] では、[第1期] と同じくマークシート方式を採用し、英語の基礎的な知識と読解力を確認することをねらいとしている。出題者が受験生に求めているのは主として次の点である。

- ①基本的な英文法・英単語・熟語をマスターしていること。
- ②語句の意味・用法と文法を正確に踏まえ、英文を総合的に理解できること。
- ③英会話に親しみ、会話の流れを理解できること。

講評

2日間を通じて出題形式は共通である。以下、2月26日の試験に沿って講評する。

① 長文総合問題。英文要旨：映画化された『クレイジー・リッチ!』の原作者ケビン・クワンは、自身の家族の記憶や移民としての背景から、アジア系アメリカ人の感情や希望を理解し、それをもとに作品を書いた。

設問1 下線部(1)のcastは「キャスト、配役」という意味の名詞。正答はウ。

設問2 下線部の語の意味を選択する問題。(2)のinstantは「即座の」という意味の形容詞で、正答はウ。(3)のclientは「顧客」という意味の名詞で、正答はア。(4)のtransitionは「移り変わり」という意味の名詞で、正答はウ。

設問3 空所補充問題。空所Aではtwo more (books)を「出版している」のであり、正答はイ。空所Bでは「高校」に「通った」のであり、正答はア。空所Cでは、several generations「数世代」が同居することを示しており、正答はイ。

設問4 下線部の意味を選択する問題。(あ)では、最上級+of the〜で「〜のうちいちばん…」という意味になり、正答はイ。(い)は、クワンは父の話に「ひきこまれ」(was attracted to)、その話(they)が子供時代を「思い出させた」(brought back)のであり、正答はイ。(う)では、whichは直前の節全体をうけ、家族の歴史についての記憶を物語として書き留める決意が小説の「着想をもたらした」(inspired)という意味になり、正答はウ。

設問5 本文の内容に合う英文を選択する問題。最終段落の3～4行目から、正答はアだと分かる。

② 会話文の問題。デジタル払いを好むLukeと現金派のHonokaの会話であり、記録や利便性と災害時の強さなどの違いが分かり、どちらにも一長一短があるという結論になる。

設問1 下線部の語句の意味を選択する問題。(1)のphysicalは「現実の、実物の」という意味の形容詞で、正答はイ。(3)のhand overは「手渡す」と言う意味で、正答はイ。(4)のreliableは「当てにできる」という意味の形容詞で、正答はウ。

設問2 下線部の意味を選択する問題。(2)のthatは、日本では現金のみ受け付ける店もあるというHonokaのことはうけた指示代名詞であり、正答はア。(5)は「支出」(spending)を「追跡する」(keep track of)という意味で、正答はイ。(6)のmiss outはデジタル払いでたまるポイントや割引の特典といった「好機を逃す」という意味で、正答はウ。

設問3 空所補充問題。空所Aの直後に、現金払いを好むHonokaとの対比を示すButがあることから、日本でもデジタル払い対応店が増加していることを示す選択肢イが入る。空所Bには、自然災害に対するデジタルシステムの脆弱性に触れた選択肢イが入る。空所Cは、二つの支払い方法の双方に利点と欠点があるとまとめるHonokaのことはを受けており、議論で新たな視点を得たことを示す選択肢ウが入る。

設問4 本文の内容に合うものを選択する問題。9行目のHonokaのことはから、イが正答だと分かる。

③ 短文空所補充問題。1. Lisaが一日中コーヒーを飲んでいて理由として前日の行動に触れており、過去の出来事を示すseem to have+過去分詞となる。正答はエ。2. heavyの比較級として適切なものは、劣等比較で「〜ほど重くない」という意味になるウ。3. speak to「〜に話しかける」が用いられた受動態であり、toの次には行為主体の前に置くbyが続くため、正答はエ。4. 義務や必要を示す助動詞mustがあり、「適切な」対策を取るべきであると分かる。正答はエ。5. Bが会議に来なかったのは、チームへの「情熱が薄れた」からであり、正答はイ。6. 静かに話すべきマナーが求められるのはin public「公共の場で」となり、正答はウ。

④ 並べかえの問題。1. It has been a yearで「一年が経った」という意味の現在完了形。2. the same+名詞+as+S+Vで「SがVするのと同じ〜」という意味になる。3. put~into practiceで「〜を実行する」という意味になる。

受験生へのアドバイス

出題者が受験生に求めているのは、オーソドックスな学習の成果であり、高校のリーディングの教科書がきちんと理解できる力がついていれば解ける問題であると考えている。

ただ、「きちんと」理解できることが重要であり、「なんとなくわかる」というレベルでとどまらないようにしてほしい。基本的な単語・熟語の習得はもちろんのこと、英文の構造をしっかり把握して、一つ一つを論理的に正確に理解していくことが、外国語学習においては特に重要である。

〈2月26・27日実施〉

出題意図

一般入試 [第2期] の問題は、例年と同じく大問2題からなる。

大問1は四字熟語の完成、漢字の部首名の把握、漢字熟語の組み立てや音訓の理解、慣用句や文法、近現代文学史の知識など、基礎的な国語力を問う小問9題から構成されている（約4割）。

大問2は読解問題であり、4,000～4,500字程度の説明的文章（論説文）を、正しく読み取ることができるかを問う小問を設けている（約6割）。なお読解の前提として本文中の漢字の表記について問い、そのうえで著者の主張への理解を問うという構成になっている。

いずれの問題も、大学入学後に必要な国語力を試すものである。

講評

大問1については、基礎的な国語知識が問われるため、日頃から四字熟語や慣用句など、知っている語彙を増やしておくことが重要である。また漢字熟語の構造など、言葉の成り立ちに関心を持っていることが望まれる。近現代文学史については、高等学校の国語教科書や便覧に載っている範囲で出題されているため、それらをよく見ることが必要である。

大問2で出題した長文の内容について、日程ごとに以下に述べる。

いずれの文章も、軸となるテーマがあり、そのテーマを論じるために先人の見解や、実例が紹介、解説されるという構造を持つ。そのため、まずは文章の軸を理解することが読解のポイントとなる。

2月26日は、重田園江『社会契約論—ホッブズ、ヒューム、ルソー、ロールズ』から出題した。課題文は、ホッブズの思想について述べた部分である。そのなかでも「ホッブズ問題」と呼ばれる論点を中心となるが、このことは第二段落から読み取ることができる。そのうえで「ホッブズ問題」とはなにか？という問いの前提として、自然状態とはどういう状態なのか、自然権とはなにかが説明されている。ここで自然状態や自然権の説明をしっかり理解しないと、次に説かれる、自然状態の脱却とはどういうことかを読み取れなくなる。著者は自然状態の脱却がいかに困難なのかを説明したうえで、その困難な過程を説明していないことが「ホッブズ問題」なのだと述べている。一見難解だが、それぞれの段階を着実に理解していけば、全体も必ず読み取れる。論理的な組み立てを考えながら読むことが大切である。

2月27日は、隠岐さや香『文系と理系はなぜ分かれたのか』から出題した。まずは冒頭に示されている「人文社会学系と理工医系はどの程度違うのか？」という問題がこの文章のテーマとなっていることに気づいてほしい。この文章ではそのテーマにしたがってさまざまな学問分野の事情を説明していく。さらに重要なのは、スノウが提唱した個性記述的な「精神の学」と、法則定立的な「自然の学」というカテゴリー区分を理解することである。著者は、まずどのような分野が個性記述的であり、どのような分野が法則定立的であるか述べていくが、その図式に当てはまらないものとして、ダーウィンの進化論、地球科学、気象学が説明されるのだ。結果、科学も人文社会学も一枚岩ではなく、両者にまたがっている分野の説明をしていく。次々に説明される学問分野は、時代によって変化していくものとして紹介されており、そうした変化も含めてそれぞれの説明を適切に読解することが必要である。

受験生へのアドバイス

大問2に関しては、説明的な文章（論説文）に慣れておくことが重要である。論説文は一見読みにくく感じられるかもしれないが、必ず筋道に沿って書かれている。それをたどれば著者の主張を知ることができ、その主張を補強するために紹介されるさまざまな例も理解することができる。一見難解に感じられるかもしれないが、論説文の文章は筋道から外れることはなく、また書かれていないことが出題されることもない。さらに、本当に難しいところには必ず著者の解説が付されている。第一印象にとらわれることなく、根気強く読んで慣れていってほしい。

大学での学びにおいて、論説文を読みこなすことは、必要不可欠の基礎力である。新聞や新書、現代文の問題集など、より多くの論説文を読むようにしてほしい。